

山と博物館

第43巻 第7号 1998年7月25日

大町山岳博物館



北鎌尾根の魅力

勝野 銀一

北鎌尾根は私の大好きなところだ。まず、ブッシュもないような、やせた岩稜であるところが好きである。それも、岩登りとミッククスして登っていくような岩稜だから、よりいっそう好きになる。

それに加えて、景色が良い。一步一步、ワンピースに登ることに展望が変わってくる。そして、槍ヶ岳は刻一刻と迫ってくるようになり、登れば登っただけ槍ヶ岳が接近してくるような感覚になるのだ。その様子というのは素晴らしいものである。

こうした反面、もちろん危険な部分も北鎌尾根にはある。登っていく中で、本当に危なくなってくるのが、天狗の腰掛け付近から、独標へ来るまでだ。独標を過ぎて西独標までの道というのは、とてもやせた尾根で、のこぎりの刃みたくに荒れている。そんな道が長く続くところを、千丈沢側から巻いて登るわけである。

そして、西独標にはとても恐ろしいところが二ヶ所ある。ひとつは四ノ沢というところで、そこには異様な形の、巨大な岩が一杯ある。単独で登っている場合に、それらの岩へ抱きついて、体を回すときに滑り落ちることが多いのだ。岩にはつかまるところがないためである。今までそこで落ちた人で生きていた人はいなかった。

もうひとつは西独標越えてから、北鎌平の下あたり、槍ヶ岳へのとつきまでのところである。西独標を越えると、心身ともに疲れてしまい、それがあまりにもひどい状態であると、疲労のために死んでしまう。ここではそういう事故が多く起こる。このような事故の原因として、北鎌尾根にはエスケープルートがないということがある。登ったら途中で、逃げ道はなく、最後まで登りきるか、下るしか道はない。

だから、私はそのあたりに場所を知らした目印をつけておく。「ここが北鎌平です」という字と赤いペンキの丸印が大勢の人を助けていると私は思う。

北鎌尾根は決して易しい山ではない。強い人間でなくてはだめだ。足も強くなければいけない、ファイトもなければいけない。ありとあらゆる技と気迫を持った者でなくては登れない山であろう。

(北アルプス一帯登山案内人、北アルプス北部地区山岳遭難防止対策協会大町理事、長野県夏山常駐隊副隊長)

松涛明氏の遺品と大町山岳博物館

扇田孝之

この七月から「大町山岳博物館」に、貴重な展示品が加わった。昭和一〇年代の登山界をリードした伝説の名クライマー松涛明氏の遺品である。

松涛氏が遭難されたのは昭和二四年一月六日、北鎌尾根千丈沢・四ノ沢出合い付近であった。厳冬期の北鎌尾根、槍ヶ岳、穂高連峰、焼岳縦走に向かう途中であった。悲劇への旅立ちには信濃大町駅である。昭和二十三年十二月二一日早朝であった。それから五〇年を経て、松涛氏は再び大町市に戻ってこられた。一本の電話



写真1 松涛氏の手帳と母上が保護のために使った札入れ

今年の三月、「山と溪谷社」に勤めている知人から電話がかかってきた。

「扇田さん、マツナミアキラっていう名前聞いたことがある」、といきなり切りだしてきた。僕は一瞬、戸惑う。あまりに思いがけない名前を耳にしたからだ。

「マツナミって、あの松涛明のこと——」
「そう、あの北鎌尾根で遭難した松涛明。あの時、松涛さんが残した手帳があるんだ」

「手帳って、『風雪のビバーク』に載っていた……、と言ってから僕は言葉が続かなかった。知人はこの遺書と二〇点余の遺品のすべてを僕にあずけ、処理を任せるといふ。僕は責任の重さに茫然とした。

『山と溪谷社』では、四年前から東京の池袋にあるサンシャインシティと共同で『東京アウトドアズ・フェスティバル』を開催している。そこで毎回テーマを決め、広く山岳にかかわる文化を紹介する。今年「人と自然との過去・現在・未来」とし、ウエストンの時代から現代にいたるまでの登山史と決まった。大町山岳博物館所蔵の小説『氷壁』のモデルになった『ナイロンザイル』とともに松涛氏の遺品も公開された。その遺品の貸し出しをお願いに伺った席で、弟の裕氏が寄贈の申し出をされたのである。

母上は昭和五九年五月、八五才で亡くなら

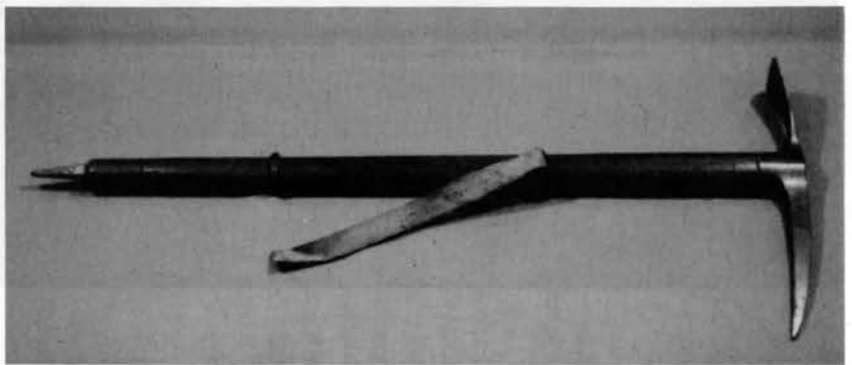


写真2 松涛氏愛用のピッケル

死ぬのはきれいだというのほうで、あの子がどんな気持ちで死んだかと思うと悲しいのです」と語っている。ようやく手元に戻ってこられた息子を一人密やかに慈しんでおられたのであろう。裕氏は「兄が山ににかけている間の母親の心配は大変なものでした。それを身近に見ていたので他の兄弟は誰も山には関心を示しませんでした」と言う。

遭難から半世紀。兄上の供養は十分になされた。この手帳や手書きの岩壁概念図、原稿さらには愛用の登山用具が、登山関係者の間で現在でも何らかの意義を持っているのならばという思いで、寄贈を決意されたのである。

僕は「大町山岳博物館協議会委員で、友人の画家齊藤清さんに連絡。奥原館長、他の協議会委員から裕氏のご意思に沿って受け入れる旨の返事をいただいたのである。」

『風雪のビバーク』への思い

『風雪のビバーク』が朋文堂から出版されたのは昭和三五年である（松涛氏が所属していた徒歩溪流会が同名の遭難報告書を出したのは昭和二五年一月である）。

僕が本書を手にしたのは、昭和四〇年前後である。当時、僕は都内の高校に通い、山岳部に所属していた。山好きの学生の間で、『風雪のビバーク』はバイブルであった。

『遺書』を繰り返し読み、死と立ち向う思いを懸命に想像し怯んだことを覚えている。同時に、旧制松本高校の受験直前に穂高岳に

でかけ、悪天候で下山できず、受験にまにあわなかったというエピソードに、大学受験を控えていた僕たちは共感を覚えていた。山に對する情熱と大学受験という通過儀礼をもっともしない精神の軽やかさが眩しかったから

れた。母上の形見を整理すると、タンスの引き出しの奥深く大切にしまわれた遺品の数々がでてきた。とくに、遭難の様子を克明に綴った手帳は、母上が愛用されていた印伝の札入れのなかにあった。

後年、松涛氏の遺書をもとにラジオ東京（現TBS）でドラマが制作された。それを紹介した毎日新聞の記事のなかで、母上は「遺書を読むと、一歩一歩死に近づいていくいましさがはつきり記されています。山で

だ。

結局、松高受験を断念、徒歩溪流会で山岳活動を続けた。昭和一八年、東京農大に入学し復員後復学。就職も決まり、これまでの総決算を賭けた登山で遭難したのである。

『風雪のビバーク』は、僕の青春時代の忘れられない一冊である。その「遺書」を手にする日が来るとは考えもしなかった。手帳に触れた瞬間、僕の全身に震えが走った。松涛氏の「幽魂」が一挙に伝わってきたような気がしたのである。

松涛明と『風雪のビバーク』

松涛氏は大正一一年三月に九人兄弟の次男として生まれたが、早くに長男と姉が亡くなり、事実上の長男として育てられた。小学校時代から主席を通じ、府立一中（現都立日比谷高校）に入学、通信省の官吏だった父親の期待を一身に集めていた。

しかし、松涛氏は中学入学を期に登山にのめり込んでいく。中学卒業の頃には、穂高、谷川岳などの岩壁、冬の仙丈岳、甲斐駒ヶ岳、八ヶ岳の縦走などを行なっている。しかもそのほとんどが単独行であった。より困難を求めて、自力で克服していく。登山に対する松涛氏の信念は最後まで貫かれていた。

昭和二十三年一月、氏はこう記している。



写真3 松涛氏(写真左端)、有元氏(右端)、内野常次郎氏(中央)。(撮影された場所、日時は不明)

「年少ない頃は、世に困難とか不可能とか言われる登攀を、なんとかして自分で果たしてみたいと思う心が強かった。私はそれを恥ずべき心とは思っていない。否、むしろかような情熱が衰えていくことこそ警戒すべきものと思う。何事によらず、先人を凌ごうとするこの種のヒロイズムこそ、人類をして今日あらしめたと感じるからだ」(「山想う心」『風雪のビバーク』二見書房版所収)。

寄贈された遺品のなかに、一枚の写真がある。撮影された日時は不明であるが、内野常次郎さんを挟んで、左に松涛氏、右に有元氏が登山服姿で写っている。端正で意思的な容貌が印象的である。そして、写真ではがっしりと大柄に見えるが、裕氏に聞くと一六五センチ位だったという。

昭和二十三年二月二日早朝、松涛氏は信濃大町駅に降り立った。全行程二三日間の第一歩であった。この日の大町は、春先のような暖かさだった。

それより九日前の二二日、松涛氏は大町駅から北鎌尾根のピーク2まで登った。荷揚げのためである。サポーターもなく、一ヶ月近い冬山生活をおくる食料と用具をすべて携行するのは不可能だったからである。

その時の日記。「大町で見たところ、雪は少なく、スキーを持った格好はよくない」。二三日、北鎌尾根、ピーク2にテントを張る。日記には「雪の消えた事オドロクばかり。P2の側稜はまるで五月の山で、地肌さえ出ている」とある。

二八日、豪雨で足止めされていた有元氏と出会い、再び北鎌尾根に入る。ミゾレや大風雪と格闘するが、手帳には記録が几帳面に綴られている。しかし、一月四日からはカタカナになる。いかに体力を消耗し、苦闘していたか、横六センチ、縦一センチの何の変哲もない手帳が雄弁に語りかけてくる。五日以降の手記の全文を紹介する。

一月五日 フーセツ (筆跡に乱れ)
SNOWHOLEヲ出タトタン(全身バリバリニコオル、手モアイゼンバンドモ凍ッテアイゼンツケラレス、ステツプカットデヤリマデユカントセシモ(有)千丈側ニスリツプ上リナオス力ナキ
(かなりしっかりした筆跡である。二枚空白)

一月六日 フーセツ
全身硬ッテ力ナシ 何トカ湯俣迄ト思ウモ有元ヲ捨テルニシノビズ、死ヲ決スオカアサン
アナタノヤサシサニ タダカンシヤ、一アシ先ニオトウサンノ所ヘ行キマス。
何ノコトヨウモ出来ズ死ヌツミヲオユルシ下サイ、
井上サンナドニイロイロ相談シテ
(以下、最後まで筆跡は確りしている。空白二枚)
井上サン イロイロアリガトウゴサイマシタ カゾクノコトマタオネガヒ



写真4 手帳に残る記録(1)

手ノユビト一シヨウデ思ウコトノ千分ノ一
モカケズ モウシワケナシ、ハハ、オト一
トヲタノミマス

有元ト死ヲ決シタノガ 六時

今 一四・〇〇 仲々死ネナイ 漸ク腰迄
硬直ガキタ、全シシフルへ、有元モ三四、
ソロソロクルシ、ヒグレト共ニ凡テオワラ
ン

ユタカ、ヤスシ、タカラヨ スマス、ユル
セ、ツヨクコヨウタノム

(文字が大きくなるが、一画一画氣力を
ふり絞って書いたのか、角張った書体
になる)

サイゴマデ タタカウモイノチ 友ノ辺ニ
スツルモイノチ、共ニユク(松ナミ)

父上、母上、私は不孝でした、おゆるし下
さい、

治泰兄 実態調査室ノ諸士、私のわがまま
を今迄おゆるし下さいましてありがとうございます
ございました

井上さん おせわになりました

荒川さん シラーフお返しできずすみませ
ん B 有元

(筆跡にほとんど力なく、判読しにくい
文字もある。やつとの思いで書いたの
だろう)

我々ガ死ンデ 死ガイハ水ニトケ、ヤガテ
海に入り、魚ヲ肥ヤシ、又人ノ身体を作ル
個人ハカリノ姿 グルグルマワル松ナミ

(五枚空白)

竹越サン 御友情ヲカシヤ
川上君 アリガトウ(松涛)

(このページに鉛筆が挟まれてあった)

有元

井上サンヨリ 二千エンカリ ポケットニ

アリ

松涛

西糸屋ニ米代借り、三升分

二人の遺体が発見されたのは昭和二十四年七
月二三日、千丈沢・四ノ沢出会い下流右岸で
あった。上流に有元氏、二メートルの間をお
いて松涛氏が横たわっていた。松涛氏の遺体
から少し離れた岩陰にライファン紙(防水
袋)に包まれた写真機と手帳が残されてあっ
た。そこは発見しやすく、増水しても流失す
る恐れのない場所であったという。

捜索に同行された裕氏は二〇才、旧制高校
に通っていた。「遺体が白骨化していて、兄



写真5 手帳に残る記録(2)

だという実感がなかった。本当の悲しみが襲
ってきたのはずつと時間がたつてからでし
た」と遙かな昔を思い出すかのように語る。
穏やかな笑顔とゆつたりした語り口に松涛氏
の面影が宿っておられるのだろうか。

大町山岳博物館の変身のために

ところで、大町山岳博物館も、半世紀近い
歴史を刻んできた。大いなる変身の時を迎え
ているようである。

僕が初めて山岳博物館を訪れたのは昭和三
八年頃である。建物は木造の校舎を移築した
もので、北アルプスの麓の小都市に相応しい
佇まいであった。その後、昭和五〇年に同じ
築場に住まいを定めてからも、友人を案内し
たり、子供と付属動物園に出かけたりしてい
た。しかし、ここの一〇年は気になる特別展に
行っても、常設展に入ることはなくなった。
確かに、大沢小屋の復元、ヒマラヤや北ア
ルプスの大パノラマ模型、体験コーナー、喫
茶室を設けるなど、さまざまな努力がなされ
ている。しかし、見せようとする情熱や工夫
が薄れているような気がするのである。

例えば、ヒマラヤの大模型である。エベレ
スト初登頂の英国隊が、日本隊の初登頂が、
女性初登頂の田部井さんが、無酸素のメス
ナーが登ったルートが模型に書込まれてあっ
たら楽しい。それに、模型にある峰々の初登
頂ルートと登頂者名も。さらに、最近人気の
あるトレッキングコースも分かたら、もつ
と興味が湧くと思う。昨年のエベレスト登頂
者は百名近い。毎年の主な山の登頂記録が一
目でわかる工夫も欲しい。新しい情報を集積
していくのも博物館の役割だからである。
大沢小屋もそうである。せつかく復元し、立

派な親父まで居るのに、登山者たちと醸し出
す小屋の臭いがない。グリンデルバルトの山
岳博物館で見た山小屋は、当時のままに、し
かも今すぐに生活できるのではと思わせるよ
うに展示されていた。

第二に、山岳博物館は「山岳」にかかわる
分野を幅広く展示しているところに特長があ
る。確かに、内外の登山史、山岳誌、山の生
物・鉱物と多彩な展示がある。しかし、今日
の「山岳」情報は膨大で、その一部でも完全
に蒐集、展示することは困難である。これか
らは、幅広いということは物足りない、不十
分と同義なのである。

滋賀県湖東町の「探検家の殿堂」では日本
のすぐれた探検家四九名を、探検した地域、
国別にとり上げ紹介している。このように、
焦点を明確に絞り、山岳のこの分野ならど
こにも負けない情報があると自負できる。そん
な「山岳」博物館をめざしていく時期にきて
いるのではないだろうか。

最後に、可能な限り館員が展示室に出て、
訪れた人と積極的に交流して欲しいと思う。
未知の人と親しくなる過程に博物館を生き生
きとさせられるヒントがたくさん隠されてい
るからである。「北アルプス博物誌・全二二
巻」を出版したような気概を取り戻して欲し
い。

(地域社会研究者、大町市在住)

山と博物館 第43巻 第7号

発行 千代田県大町市大字大町八〇五五
大町山岳博物館

印刷 大系タイムス印刷部
TEL 026-1111011

定価 一、五〇〇円(送料共)(切手不可)
郵便振替口座番号 0540171111